松村通信第１０９号

2020 年 6 月 3 日
松村勝弘

検事長辞任に見る
日本のジャーナリズムの問題性

黒川検事長問題

黒川検事長の賭け麻雀問題浮上による検事長辞任とそれの「処分」が緩すぎで巨額の退職金も支給され、これがまた問題化している。とりわけ後者、検事長辞任に至る過程で明らかになったのが朝日・産経両紙の記者らと検事長の賭け麻雀が週刊文春にすっぱ抜かれ、稲田検事総長の後任と見られていた黒川検事長が辞任に追い込まれた。ここではその問題よりもむしろ、新聞記者らが検事長と麻雀卓を囲んでいたことを問題にしたい。これはいわば検察とジャーナリストの癒着の問題である。ここに日本のジャーナリズムがおかれている問題が浮き出ているからだ。

これに関連して「賭け麻雀黒川元検事長の件の本質。多くの国民を不幸にする日本の権力構造の闇。記者クラブ問題を元新聞記者と語る。ジャーナリスト烏賀陽弘道さんと」（ https://www.youtube.com/watch?v=5n57beR99pk） という youtube の対談が大変面白かった。それで某先生にも紹介したものである。この読者にも紹介しておきたい。そこでは、日本のジャーナリズムの問題性が指摘されていた。また日本の記者クラブ制を問題にしていた。例えば自民党の記者クラブに出入りしている朝日新聞記者は実は、例えば朝日新聞から自民党に出向しているに過ぎないという。つまりメディアは権力の側だから、日本のマスコミは市民の味方だというのは大きな間違いだという指摘がされていた。黒川問題は実は構造的だと指摘していた。ここでは、これに関連していくつか考えてみたい。

記者クラブ制の問題　記者クラブ制の問題については、かねて問題だと思っていた。その問題に気づかせてもらったのは、元日経記者だった和佐隆弘氏のおかげである。和佐氏は引退後日経の株式売買について訴えた人である。さらに日経社長を訴えた日経記者大塚将司氏と共闘した、そういう人であった。記者クラブ制は結局記者が努力しなくても当局発表を垂れ流すだけで、自ら取材の労をとらないことにつながるだけでなく、むしろ当局に取り込まれることになるだけであることが明らかである。この問題については、**上杉隆『ジャーナリズム崩壊』**幻冬舎新書、2008 年や**大鹿靖明編著『ジャーナリズムの現場から』**講談社現代新書、2014 年に詳しく書かれている。

「新聞や放送のかなり多くのニュースは当局発表に依存している。朝日、毎日、読売の三大紙の朝刊に占める発表モノの記事の面積比率は 49 ～ 55 ％を占め、発表モノに少し独自の味付けをした記事を入れると 60 ％にもなる。解説記事における発表依存度はなんと 80 ％に達する。

しかも新聞記者が特ダネと称する記事の少なからずは、実は当局者（官公庁、捜査機関、大企業）のリークか、少なくとも当局者の意図に沿う報道にすぎない。発表の直前に掲載されることの多いリーク型の特ダネ記事は、読者や視聴者の視点に立てば、発表モノと何ら変わらない。こうした記者クラブ型とも呼べる報道は、常に当局者に依存し、発表主体である当局の動きに受動的になりがちだ。クォリティペーパーといわれることがある日経新聞だが、海外メディアからは『大きな「企業広報掲示板」』『大量のプレスリリースの要点をまとめてさばいているだけ』と辛辣に批評されてもいる。」（大鹿、335-336 頁）

実は、先に youtube の対談を某先生に紹介したといったが、二人の対談は「今後ジャーナリストを目指そうしている人々のことまで考えて、話しているとは到底思えませんでした」というコメントをいただいた。それで上記『ジャーナリズムの現場から』を読む気になったわけである。こちらの方がはるかに内容も豊富で、しかもジャーナリズムの問題も指摘されているが、ジャーナリストという仕事の面白さ、意義も論じられていて、対談よりはるかに実りが多かった。むしろこちらを読むことをお薦めしたい。先に紹介した日経記者大塚将司氏もこの本の中で対談されている。

メディアは権力の側　さきの youtube 対談でもメディアは権力の側だといっていたが、『ジャーナリズムの現場から』でも同旨の指摘がされていたので紹介しておこう。大鹿氏曰く、原発事故後報道陣が東電に取材をしていたが「やがて東電の首脳の自宅前で印象的な光景に遭遇した。経営責任があり、事故収束の責任者でもある首脳に対して、記者たちはおもねり、おもんぱかる。ある晩の最初の質問は『お身体は大丈夫ですか』だった。そんな低姿勢だから向こうはつけあがる。あれだけの惨事を招いたというのに、カエルの顔にションベン、他人事である。ノブレス・オブリージュのかけらもない東電エリートの首脳。それに対してご機嫌を伺うといった調子の記者たち。かくして報道機関は大本営発表を垂れ流し、マスコミ不信は増幅されてゆく。」（大鹿、5 頁）そしていう。「いまの大手報道機関はどこもそうですが、情報を持っている相手に対して『与党化』するんです。それは捜査機関でもあるし、官公庁や大企業、有力な政治家でもあるんですが、与党化することによって当該取材先からいかに早く情報をとるかということに全精力を傾けています。特に社会部持ち場の、検察、警察、国税、裁判所、宮内庁にまるでジャーナリスティックに迫れていない。」（大鹿、38 頁）

ジャーナリズム崩壊　記者クラブ制を批判し

健全なジャーナリズムを求めているのは大鹿氏だけではない。ニューヨーク・タイムズの記者でもあった上杉隆氏の本も紹介しておくべきだろう。上杉氏は日本のメディアの異常性を諸外国と比較して論じられている。

「発生ものなどのストレートニュースは、可能な限り[AP や共同通信のような]ワイヤーサービスに依存する傾向にある。これはニューヨーク・タイムズに限った話ではない。米国のみならず、欧州、アジアなど、ほとんどの新聞がそうしたシステムをとっている。海外では、新聞記者と通信記者は、[NYT 東京支局長だった]クリストフ氏の解説通り、カメラマンと記者くらい感覚の違う職業なのだ。

だからこそ、ニューヨーク・タイムズは、33人の海外特派員(2000 年当時)、すべての記者を合わせても 300 人ほどの人員で、連日、通常版で約 100 ページ、日曜版だと 300 ページを超える新聞を作ることが可能なのだ。

それに比して日本の新聞社はじつに多くの記者を抱えている。」(上杉、23 頁)海外の記者は署名入りで切り口を売り物に比較的長い記事を新聞などに掲載している。これがジャーナリストの生命である。匿名で一見客観的に見える、その実、政府発表の垂れ流しをしている日本の記者とまるで違う。

「政府による発表に頼り切り、それを疑問にすら思わない批判精神の欠如がこうした報道を生むのだろうか。日本の新聞は、一体いつから、公権力の一部になってしまったのだろうか。」(上杉、87 頁)このようにいわれている。さらに、「彼ら[日本の記者たち]にとって何を取材するかはほとんど重要ではない。重要なのは、他の記者が取材に行くかどうか、ということなのだ。つまり、単に仲間はずれにならないかどうか気を遣っているに過ぎないのである。

この驚くべき判断基準は、世界のジャーナリストたちの精神と対極をなす。海外の記者ならば、他の記者が取材していたら、自らはそれを避けるだろう。他社と同じ情報、同じ記事、同じ映像をいくら並べようとまったく評価されない。他社と違う切り口、異なったものの見方を提示してこそ、初めて一人前のジャーナリストとしての存在価値が認められるのだ。

ところが、日本の記者クラブはまるで逆である。可能な限り同じ情報に接して、ライバルたちとともに行動し、同じような記事を並べることが、記者の仕事だと勘違いしているかのようだ。」(上杉、170-171 頁)

「日本は……。事前に、首相に質問を教える記者たち、政府への批判を避ける新聞、同業者を排除する記者クラブ……。

日本のメディアが取材対象との緊張関係を失ったのはいつの頃からだろうか。とりわけ記者クラブの記者たちは、国民の知る権利に答えようとするよりも、政治家たちとうまくやろうとばかり考えているように見える。

それは日本の記者が会社員であることの影響が大きい。」(上杉、230 頁)

メディアの機能不全で権力が増長　だから大鹿氏の対談相手である、長谷川幸洋氏はこう言って、日本のメディアのレベルの低さを嘆いているのである。「取材記者がインナーサークルの一員であろうとすることに汲々とするのと同じように、論説記者もインナーサークルの一員でありたがる。日銀、財務省、検察みんなそうです。経済記者も司法記者もみんなそうです。

論説は報道と違って自分の論と説を唱えるということなんだから、やっぱり自分のロジックに首尾一貫したものがなければ、論と説にならないよね。だから私の目から見ると、論説らしい論説なんて、ほとんどお目にかかったことがない。これ、役人が言っている話をそのまま書いているんだよなって、そう思うのばかり。」(大鹿、94 頁)

メディアが権力の側だから、権力もつけあがることになる。黒川検事長の問題だけでなく、さまざまな問題を起こしている安倍政権にメディアが迫れないのは当然でもあり、政権は国民をないがしろにすることになる。この点同書は毎日新聞学芸部記者である栗原俊雄から次の言葉を引き出している。「この国の為政者や官僚機構は結局、国民を守ることは後回しにするんです。それぞれの組織、それぞれの秩序が優先されるんです。自分たちの省益が最優先。それで国民には我慢しろ、あきらめろという。受忍論です。」(大鹿、259 頁)

現実と希望・願望の混同　先に youtube 対談で出てくる烏賀陽弘道氏であるが、確かにそこでは言いっぱなしで、某先生の言われるとおり、ジャーナリストになることに絶望させる内容となっているが、一体この人はどんな人なんだと気になったので著書を読んでみた。面白い本だったので一度別に論じてみたいが、ここでは一点に絞って紹介しておきたい。烏賀陽氏が米大学院で受けた講義で言われたことのうち興味深いところを紹介しておきたい。「私がコロンビア大国際公共政策大学院に入って、ジョン・ラギー学長に最初の授業で教わったもう 1 つの教訓に『国際関係論での情報分析では、現実と希望・願望を混同してはならない』があります。……その言葉を英語でそのまま引用すると“Never mix what it is and what it should be”です。……

国際政治に限らず、人間が現実を認識する時『こうあってほしい』『こうなるはずだ』『こうなるべきだ』という予断（バイアス）がかかります。これは人間が自然に持っている心理作用です。しかし、国際関係分析の時には、それを可能な限り排除すべし。願望・希望を現実と混同すると、危険である。ラギー学長はそう教えました。」(烏賀陽弘道『世界標準の戦争と平和』扶桑社、2019 年、271 頁)

人は考える時、どうしても希望的観測を持ち過ぎる。これは記者だけの問題ではない。研究者も同じである。自戒したい。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。